

卒業生・修了生並びに保護者の皆様、この度のご卒業並びに修了、誠にめでとうございます。これからは、皆さんの身につけられた学位を羅針盤として、社会への第一歩を、勇気をもって踏み出して頂きたいと思います。

卒業生の皆さんは、中国武漢から端を発した新型コロナウイルスによる感染拡大が、世界的規模となり、パンデミックとなった中で入学されました。当時、政府からは「多数の方が集まるような全国的なスポーツ、文化イベント等については、大規模な感染リスクがあり、中止、延期又は規模を縮小する」という要請が出ていました。一方、WHOも新型コロナウイルスの世界への感染拡大を受け、その危険度を四段階最高のレベルである

「非常に高い」へと引き上げました。世界への感染拡大に歯止めがかけられない状況でした。その中、本学も、皆さんの入学式を中止せざるを得ない状況でした。

その後も、今日まで、新型コロナウイルスの感染拡大の波が繰り返す中、皆さんは、本学園での勉学や生活にも厳しい制約を負いながらの四年間となりました。

一方、全国的に人や物の流れが止まり、大学における教育の在り方が変貌し、社会経済が低迷しました。対面授業や実習、更には通学にも大きな支障が出ました。経験のない状況とは言え、皆さんには多大なご迷惑おかけしたことが、悔やまれます。

昨年5月8日から、学校感染症においても、いわゆる二類相当から「第五類感染症」へと緩和されました。以来、社会や学園生活にも自由が少しずつ戻ってきました。未だに変異を繰り返す新型コロナウイルス感染症は消えたわけではありません。加えて、インフルエンザと共存しつつ、広く蔓延し続けています。しかし、その中でも、学園本来の姿を取り戻そうと努力する中、今日の皆さんの学位授与式を迎える事ができました。

さて一方、海外では、ロシアのウクライナ侵攻やパレスチナ・イスラエル戦争の勃発を始め世界各地で国際的な緊張が高まっています。

「人新世」といわれる現代、グローバル化による人口増加や人の移動の加速化、生態系への人間の無秩序な進出、地球温暖化による熱帯雨林の破壊、加えて、野生動物の生息地の縮小など、人間世界や自然の生態系を含め、あらゆる局面で、競合し、相互に侵入し合う世界になってきました。ここに、人から人へと感染症が拡大していく、すなわち、今回の新型コロナウイルスが感染拡大を続ける最大の要因があります。

さて、本年は元旦から「能登半島地震」の勃発により初夢を破られ、驚きの年を迎えました。被災地の方々の多くは、未だに悲惨な状況にあります。

思い起こしますと13年前の平成23(2011)年3月、本学はこの会場で卒業式を行っていました。前学長の吉益文夫先生が式辞の挨拶をされていました。その時、会場にいた私たち

は不意に「めまい」を感じました。一瞬、何が起こったのか理解しかねていました。前学長の頭上にあった学位授与式の看板が、大きく、ゆっくりとゆれていました。皆さんもご存じの「東日本大震災」でした。すぐさま、震度7の大津波が、仙台空港へ押し寄せる恐ろしい光景が実況されていました。その光景は、はっきりと私たちの記憶に残っています。

さて、皆さんは、このような状況の中、社会に貢献できる「医療人」として、新たな社会への第一歩を踏み出されます。これからは歩まれる医療社会において、これまで本学で研鑽され、身につけられた学識や技術を生かして、独自の力で判断し、未知の課題に立ち向かうことが求められています。

危機に対しては、「正しく恐れる」ことが大切であることを、皆さんは、このコロナ禍で、学ばれたことと思います。戦争や地震、風水害など、目に見える大きな爪痕を残す災害は、人々のイメージに極めてよく残ります。しかし、ここで注意して頂きたいのは、今回の新型コロナウイルス感染症のように多くの人々の命を奪ったこの感染症さえ、もはや、震災や風水害などのようにはっきりとした体験的なイメージとしては、残ってないのではないのでしょうか。さらに、「5類感染症」となり、感染対策が緩和された今、私たちの意識は、その緊張感から解放され、危機意識が薄れつつあるのではないのでしょうか。

ほぼ百年前、1918年の春、第一次世界対戦の終わりの頃、世界は『史上最悪のインフルエンザ』のパンデミックを経験しています。しかし、米国の歴史学者クロスビー氏が云うように、世界で5千万人とも云われる死者を出したこのパンデミックさえ忘却の危機にありました。

日本でも、内務省衛生局の『「流行性感冒「スペイン風邪」大流行の記録』があり、死者は38万8千人と記載され、最近では、死者は48万人以上だったとも云われています。当時、「スペイン風邪」と呼ばれましたが、その発生源は、未だに解明されていません。その10年後におきた関東大震災は、死者は10万人と云われますが、大正時代の歴史的事実としても、国民的に克明に記憶されています。これに対して、同時代、その5倍近い人的被害を来した「スペイン風邪」は、歴史的にも、その全貌は、はっきりとは残されていません。何故でしょうか？

そして、このコロナ禍での私たちの経験も忘れ去られていくのでしょうか。もう一度、これからの医療人として、この歴史的経験をよく考えなければなりません。

21世紀は、「感染症の世紀」とも言われています。今日、「スペイン風邪 (A1H1)」よりも致死性の高い新たな亜型 H5N1 の「強毒性新型インフルエンザ」のパンデミックの到来、新たな人獣共通感染症の危機がかねてから懸念されています。

卒業生・修了生の皆さん、どうか医療人として新型コロナウイルスパンデミックの経験をもとに正しい見識を持って頂きたいと思います。常に、「正しく恐れる」という医療人として科学的な姿勢を忘れないで下さい。生命への畏敬の念を持ち、医療人として医療の道を、その初心を忘れず、建学の精神「社会に役立つ道に生きぬく奉仕の精神」を持って歩んでい

かれることを、心から願っています。

最後に、能登半島地震で被害に遭われた人々の一日にも早い復興とご健康をお祈りいたします。

改めて、この度はご卒業・修了、誠におめでとうございます。

令和6年3月8日

関西医療大学 学長 吉田宗平